

西南学院大学 安部 計彦

この調査票は、児童相談所に勤務している教員出身者の方全員にお伺いします。

## 記入方法

- (1) 表の空欄や ( ) 内には、数字や文章等を記入してください。
- (2) 質問で選択肢のあるものは、丸で囲んである数字の該当するものを○で囲んでください。
- (3) 「複数回答可」と書いてある設問以外は、必ず一つをお選びください

都道府県名 ( ) 児童相談所名 ( )

- 1 現在の勤務形態は常勤ですか、非常勤（嘱託）ですか。  
①常勤 ②定年で退職した後の非常勤（嘱託） ③定年前に退職した後の非常勤（嘱託）
- 2 現在の職名は何ですか。  
①児童福祉司 ②児童心理司 ③児童指導員 ④学習指導員 ⑤管理職（肩書き） ⑥その他（ ）
- 3 児童相談所での勤務年数はどれくらいですか。（ ）年目
- 4 児童相談所に勤務する、おおよその予定期間はどれくらいですか。（ ）年間
- 5 児童相談所に配属されるまでの教職経験年数はどれくらいですか。（ ）年  
（講師、教諭、教育委員会（教育事務所）勤務、首長部局勤務、管理職などを含む）
- 6 児童相談所に勤務する直前の職場はどこですか。  
①小学校 ②中学校 ③高等学校 ④教育委員会（教育事務所） ⑤首長部局 ⑥特別支援学校（盲学校・聾学校・養護学校）小学部 ⑦特別支援学校（盲学校・聾学校・養護学校）中学部 ⑧特別支援学校（盲学校・聾学校・養護学校）高等部 ⑨その他（ ）
- 7 児童相談所に勤務する直前の肩書きは何ですか。  
①教諭 ②教頭 ③副校長 ④校長 ⑤教育委員会指導主事 ⑥教育委員会勤務（指導主事以外） ⑦教育委員会係長級 ⑧教育委員会課長級 ⑨教育委員会部長級 ⑩首長部局勤務 ⑪首長部局係長級 ⑫首長部局課長級 ⑬首長部局部長級 ⑭その他（ ）
- 8 これまでの勤務校における主たる担当教科は何ですか。  
①全教科 ②国語 ③算数（数学） ④理科 ⑤社会 ⑥外国語 ⑦保健・体育 ⑧家庭科 ⑨美術 ⑩書道 ⑪音楽 ⑫その他（ ）
- 9 これまでの勤務校における主たる校務分掌は何ですか（複数回答可）。  
①総務・庶務 ②教務 ③生徒指導・生活指導 ④生徒会（児童会）指導 ⑤進路指導 ⑥保健 ⑦図書 ⑧人権教育・同和教育 ⑨情報システム ⑩その他（ ）
- 10 教員が児童相談所に勤務することについて、どのようにお感じですか（ ）
- 11 あなたは現在のご自分の業務について、どのようにお感じですか（ ）

質問は以上です。ありがとうございました。

## 記入方法

- (1) 表の空欄や（ ）内には、数字や文字、文章等を記入してください。なお日数や件数で、ない場合や該当しない場合は「0」とお書きください。
- (2) 質問で選択肢のあるものは、数字の該当するものを○で囲んでください。
- (3) 「複数回答可」と書いてある設問以外は、必ず一つをお選びください

この調査は委託一時保護を受ける機関のみなさまの状況についてお聞きすると共に、これまでご協力いただきました調査研究から作成しました委託一時保護に関するガイドライン案についてのご意見、要望をおうかがいするものです。ご多忙中恐縮ですがご協力をお願いいたします。

## 1. 基本情報

貴施設の状況をご記入下さい

- (1) 機関の種類 ①乳児院 ②児童養護施設 ③児童自立支援施設 ④情緒障害児短期治療施設
- (2) 都道府県名 ( )
- (3) 管轄の児童相談所には一時保護所がありますか ① ある ② ない
- (4) 委託一時保護を児童相談所から打診される場合の窓口は誰ですか  
①園長 ②次長 ③主任指導員 ④主任保育士 ⑤FSW ⑥その他 ( )
- (5) 市町村からのショートステイを受けていますか ① 受けている ② 受けていない

## 2. 平成17,18年度に受けた委託一時保護件数をご記入下さい。理由は主たるもの一つを選んでください

理由	夜間・緊急	一時保護所の定員超過	措置前提	専門的な援助	保護者の取り返し回避	一時保護所が遠距離	その他	うち虐待
17年度件数								
18年度件数								
平均期間 (最短最長)	日 ( ~ )	日 ( ~ )	日 ( ~ )	日 ( ~ )	日 ( ~ )	日 ( ~ )	日 ( ~ )	日 ( ~ )

## 3. 対応困難

委託一時保護を受けて、困ったことがありますか（複数回答可）

- ①保護者への対応 ②子どもの反抗 ③衣服の準備 ④子どものダニ等の持ち込み ⑤子どもの病  
気 ⑥子どもが馴染まない ⑦昼間の過ごし方 ⑧他児への影響 ⑨子どもの言動の真意不明  
⑩その他 ( )

## 4. ガイドライン案に対する現状と意見

平成17,18年度調査等を基に、「児童相談所・保護者が安心して子どもを委託でき、委託先が安心して子どもを引き受けられ、その結果として子どもが安全で安心して生活できる制度」であることを基本的な目標として、委託一時保護のガイドライン案を作成しました。各項目についての現状とご意見をお伺いします。

## (1) 児童相談所からの情報提供

ア：委託理由別の現在の状況（a～c）を各欄にご記入下さい

- a 必ず提供されている b 子どもにより提供されている c 提供されていない

委託理由 情報内容	夜 間・緊 急	一時保護所 の定員超過	措置 前提	専 門 的 な 援 助	保 護 者 の 取 返 し 回 避	一 時 保 護 所 が 遠 距 離	その他
子どもの名前、住所、生年月日、所属							
保護者の氏名、年齢							
保護者の連絡先							
一時保護の理由							
子どもの性格、行動特徴、知的能力、 健康状態							
子どもの集団内での対人関係							
子どもの身辺処理能力							
保護者の行動様式							
子どもと保護者の関係							
保護者の児童相談所との関係							
子どもの生育歴							
委託一時保護の期間、今後の見通し							
その他 ( )							
その他 ( )							

イ：児童相談所から必ず提供して欲しい情報をご記入下さい。

a 必ず提供してほしい b 子どもにより必要 c 特に必要性はない

委託理由 情報内容	夜 間・緊 急	一時保護所 の定員超過	措置 前提	専 門 的 な 援 助	保 護 者 の 取 返 し 回 避	一 時 保 護 所 が 遠 距 離	その他
子どもの名前、住所、生年月日、所属							
保護者の氏名、年齢							
保護者の連絡先							
一時保護の理由							
子どもの性格、行動特徴、知的能力、 健康状態							
子どもの集団内での対人関係							
子どもの身辺処理能力							
保護者の行動様式							
子どもと保護者の関係							
保護者の児童相談所との関係							
子どもの生育歴							
委託一時保護の期間、今後の見通し							
その他 ( )							
その他 ( )							



## 記入方法

- (1) 表の空欄や( )内には、数字や文字、文章等を記入してください。なお日数や件数で、ない場合や該当しない場合は「0」とお書きください。
- (2) 質問で選択肢のあるものは、数字の該当するものを○で囲んでください。
- (3) 「複数回答可」と書いてある設問以外は、必ず一つをお選びください

この調査は委託一時保護を受ける里親のみなさまの状況についてお聞きすると共に、これまでご協力いただきました調査研究から作成しました委託一時保護に関するガイドライン(案)についてのご意見、要望をおうかがいするものです。ご多忙中恐縮ですがご協力をお願いいたします。

## 1. 基本情報について

- (1) 都道府県名 ( )
- (2) 登録の児童相談所には一時保護所がありますか ① ある ② ない
- (3) 里親登録をされて何年ですか ①1年 ②2年～5年 ③6年～10年 ④それ以上
- (4) 里親の種類について(複数可) ①養育里親 ②短期里親 ③専門里親 ④その他

## 2. 平成17.18年度に受けた委託一時保護件数をご記入下さい。理由については主たるもの一つを選びその欄に件数をご記入ください。

主たる理由	夜間・緊急	一時保護所の定員超過	措置前提	専門的な援助	保護者の取り返し回避	一時保護所が遠距離	その他	うち虐待件数
17年度件数								
18年度件数								
平均期間 (最短～最長)	日 (～)	日 (～)	日 (～)	日 (～)	日 (～)	日 (～)	日 (～)	日 (～)

## 3. 対応困難

委託一時保護を受けて、困ったことがありますか(複数回答可)

- ①保護者への対応 ②子どもの反抗 ③衣服の準備 ④子どものダニ等の持ち込み ⑤子どもの病  
気 ⑥子どもが馴染まない ⑦昼間の過ごし方 ⑧他児への影響 ⑨子どもの言動の真意不明  
⑩その他( )

## 4. ガイドライン案に対する現状と意見

平成17, 18年度調査等を基に、「児童相談所・保護者が安心して子どもを委託でき、委託先が安心して子どもを引き受けられ、その結果として子どもが安全で安心して生活できる制度」であることを基本的な目標として、委託一時保護のガイドライン案を作成しました。各項目についての現状とご意見をお伺いします。

## (1) 児童相談所からの情報提供

ア: 主たる委託理由別の現在の状況(a～c)を各欄にご記入下さい

- a 必ず提供されている, b 子どもにより提供されている, c 提供されていない

委託理由 情報内容	夜間・緊急	一時保護所の定員超過	措置前提	専門的な援助	保護者の取返し回避	一時保護所が遠距離	その他
子どもの名前、住所、生年月日、所属							
保護者の氏名、年齢							
保護者の連絡先							
一時保護の理由							
子どもの性格、行動特徴、知的能力、健康状態							
子どもの集団内での対人関係							
子どもの身辺処理能力							
保護者の行動様式							
子どもと保護者の関係							
保護者の児童相談所との関係							
子どもの生育歴							
委託一時保護の期間、今後の見通し							
その他（ ）							
その他（ ）							

(2) 児童相談所から必ず提供して欲しい情報をご記入下さい。

a 必ず提供してほしい b 子どもにより必要 c 特に必要性はない

委託理由 情報内容	夜間・緊急	一時保護所の定員超過	措置前提	専門的な援助	保護者の取返し回避	一時保護所が遠距離	その他
子どもの名前、住所、生年月日、所属							
保護者の氏名、年齢							
保護者の連絡先							
一時保護の理由							
子どもの性格、行動特徴、知的能力、健康状態							
子どもの集団内での対人関係							
子どもの身辺処理能力							
保護者の行動様式							
子どもと保護者の関係							
保護者の児童相談所との関係							
子どもの生育歴							
委託一時保護の期間、今後の見通し							
その他（ ）							
その他（ ）							

- (2) 委託された子どもに対してご家庭での生活について気をつけておられることがありましたらご記入下さい。( )
- (3) 保護者との関係で困られたことがありますか。 ① ある ② ない  
ある場合、どのようなことですか。また、どのように対応されましたか。( )
- (4) 委託一時保護についての研修の実施状況について  
ア：実施状況について ① 実施されている ② 実施されていない  
イ：委託一時保護についての研修等は必要と思いますか。  
① 必要と思う ②特に必要性は感じない ③ その他 ( )
- (5) 1週間以上の委託の場合、小・中学校等への通学はさせていますか(複数可)。  
①可能な場合、出身校への通学をさせている ②里親の地元の学校へ一時的に通学・転校させている ③通学はさせていない ④その他 ( )
- (6) 委託料はいくらぐらいが適切と思われますか。  
①施設措置費 ②現行単価(1560円)+施設事務費や教育費 ③5000円 ④3000円 ⑤ショートステイの現行利用料(2歳児未満10800円、2歳児以上5600円) ⑥その他 ( )
- (7) 委託一時保護についてのご意見  
ア：今後委託一時保護を積極的に受け入れますか  
①積極的に受け入れたい ②やや積極的 ③やや消極的 ④消極的 ⑤その他  
理由、課題等 ( )  
イ：委託一時保護をより受け入れやすくする上で児童相談所に最も求める支援は何でしょうか  
①適切な情報提供、②トラブル時の迅速な対応、③子どもへの適切なオリエンテーション  
④保護者への適切なオリエンテーション、 ⑤その他 ( )
- (8) 委託一時保護ガイドラインについてのご意見や要望などありましたらご記入下さい。  
( )

質問は以上です。ありがとうございました。

いちじほごしょ せいかつ  
◆一時保護所で生活しているみなさんへ◆

調査票 V-1

せいなんがくいんだいがく あへ かずひこ  
西南学院大学 安部 計彦

いま ぜんこく  
今、全国には、みなさんのように児童相談所の一時保護所で生活している子どもたちがたくさんいます。  
わたし わたし  
私たちは、その一時保護所が、少しでもみなさんにとって「安全で安心できる場所」になるよう、  
かんが かんが  
考えています。

そこで、みなさんが、ここでの生活をどのように感じているのかを、ぜひ知りたいと思っています。  
みなさんに書いてもらったアンケートの結果は、より良い一時保護所になるように、国(厚生労働省)や、皆さんのいる児童相談所に報告します。

みなさんが、ここでの生活で感じていることを、ぜひ、私たちに教えてください。

【このアンケートの書き方】

- このアンケートは、小学校4年生以上の子供達にお願いしています。
- 質問にしたがって、のなかに、**文**で書いたり、**番号1つに○**をつけてください。  
ただ「**あてはまるものすべてに○**」とある質問には、**あてはまる番号すべてに○**をつけてください。
- 答えたくない質問や、わからないことは、答えなくてもかまいません。
- アンケートには、あなたの名前を書かないので、だれが書いたかはわかりません。
- このアンケートに答えたこと、答えなかったことで、イヤな思いをすることは絶対にありません。  
あんしん  
安心してください。

【アンケートを書き終わったら・・・】

- アンケートをすべて書き終わったら、大きな封筒へ入れてください。
- 職員の方がみんなのアンケートをまとめて西南学院大学まで送ってくれます。

◆あなたについて教えてください。

せいべつ おとこ おんな ねんれい さい  
●性別<①男 ②女> ●年齢< 才>

がっこう しょうがっこう ちゅうがっこう こうとうがっこう た がくねん ねんせい  
●学校<①小学校 ②中学校 ③高等学校 ④その他( )> ●学年< 年生>

いちじ ほごしょ き ひ きょう にちめ  
●一時保護所に来た日から今日で< >日

◆ここでの生活について、あなたが思っていることや感じていることを教えてください。

問1. ここでの生活で、あなたは次のようなことを感じることはありますか？(あてはまるものすべてに○)

①楽しい ②嬉しい ③わくわくする ④心がおちつく ⑤リラックスできる ⑥頭が痛い  
⑦おなかが痛い ⑧眠れない ⑨イライラする ⑩悲しくなる ⑪その他( )

問2. ここに来る前に一時保護所がどのような所なのか説明されましたか？(1つに○)

①された ②覚えていない ③されなかった



問3. 説明された人は、その説明は、わかりやすかったですか？（1つに○）

- ①わかりやすかった ②わかりにくかった ③まったくわからなかった

問4. ここに来る前に、ここについてどんなことを知りたかったですか？（自由に書いてください）

問5. 自分がなぜ、ここで生活することになったのか、その理由を説明されましたか？（1つに○）

- ①された ②されたけど、わからなかった ③されなかった

問6. 理由を説明された人は、その説明に納得できましたか？（1つに○）

- ①できた ②すこしできた ③あまりできなかった ④まったくできなかった

問7. ここに来ることが決まった時、あなたは、どんな気持ちでしたか？（あてはまるものすべてに○）

- ①うれしい ②楽しみ ③心配 ④不安 ⑤いやだ ⑥しかたがない ⑦複雑 ⑧早く行きたい  
⑨その他（ ）

問8. ここでは、友達ができましたか？（1つに○）

- ①できた ②できない ③どちらともいえない

問9. ここでは、友達と楽しく遊んだり、お話することができますか？（1つに○）

- ①よくできる ②すこしできる ③あまりできない ④まったくできない

問10. ここでは、ほかの友達から、次のようなことをされたことがありますか？（あてはまるものすべてに○）

- ①たたかれた ②けられた ③殴られた ④いやなことをされた ⑤無視された ⑥仲間はずれにされた ⑦大声でどなられた ⑧自分の物をとられた ⑨悪口を言われた ⑩とくにイヤなことはされない ⑪その他（ ）

問11. ここでの生活で、職員の人に、大切にされていると感じることはありますか？（1つに○）

- ①よくある ②すこしある ③あまりない ④まったくない

問12. それは、なぜですか？（自由に書いてください）

問13. ここでの生活で、職員の人から次のようなことをされたことがありますか？（あてはまるものすべてに○）

- ①たたかれた ②けられた ③殴られた ④いやなことをされた ⑤無視された ⑥仲間はずれにされた ⑦大声でどなられた ⑧自分の物をとられた ⑨悪口を言われた ⑩とくにいやなことはされない ⑪その他（ ）

問14. ここでの生活で、職員の人にしてもらって、うれしかったことは何ですか？（あてはまるものすべてに○）

- ①遊んでもらった ②勉強を教えてもらった ③ほめられた ④やさしいことばをかけてもらった ⑤話をきいてくれた ⑥気持ちを聞いてくれた ⑦しかってくれた ⑧守ってくれた ⑨認めてくれた ⑩約束を守ってくれた ⑪その他（ ）

問15. そのほかに、職員の人に、「こんなことをしてもらえたらうれしい」ということがあれば、教えてください。（自由に書いてください）

問16. あなたは、どのような時に、職員に反発（反抗）したくなりますか？（あてはまるものすべてに○）

- ①ちゃんと話を聞いてくれない時 ②遊んでくれない時 ③叱られた時 ④自分がイライラしている時 ⑤不安な時 ⑥体調が悪い時 ⑦反発（反抗）したくなる時はない ⑧とくに理由はない ⑨その他

問17. そのほかにも職員に反発（反抗）したくなることがあれば、どんな時やどんなことなのかを教えてください。（自由に書いてください）

問18. この職員や児童相談所の人で、あなたの話をよく聞いてくれる人はいますか？（1つに○）

- ①何人もいる ②一人だけいる ③いない ④わからない

問19. それは、誰ですか？（あてはまるものすべてに○）

- ①指導員 ②保育士 ③学習指導員 ④調理の人 ⑤保護所の心理の人 ⑥児童福祉司 ⑦児童心理司 ⑧夜間指導員 ⑨学生アルバイト ⑩その他（ ）

問20. ここでの生活で、職員の人への要望（「もっと、こうしてほしい」など）があれば教えてください。（自由に書いてください）

問21. ここでの生活で、いやなことやつらいこと、悲しいことがあったときは、どうしていますか？（あてはまるものすべてに○）

- ①職員に話す ②友達に話す ③スポーツをする ④マンガや本を読む ⑤ゲームをやる ⑥部屋にこもる ⑦寝る ⑧あきらめてなにもしない ⑨泣く ⑩暴れる ⑪人に当たる ⑫ケンカする ⑬一人になる ⑭その他（ ）

問22. あなたが、今、一番心配なことは、何ですか？（自由に書いてください）

問23. あなたが、ここに来て一番良かったと思えることは、何ですか？（自由に書いてください）

問24. ここでの生活は、安心できますか？（1つに○）

- ①とても安心できる ②すこし安心できる ③あまり安心できない ④まったく安心できない

問25. それはなぜですか？（自由に書いてください）

問26. 一時保護所に点数をつけるとしたら、100点満点で、何点ですか？

100点満点ちゅう、< >点

◆おわり…ご協力ありがとうございました◆

## 「子ども用調査票(調査票V-1)」実施方法に関する職員アンケート

一時保護中の小学校4年生以上の子どもを対象にしたアンケート(調査票V-1)の、貴所での実施状況等やご意見についてお尋ねします。

子ども向けのアンケート(調査票V-1)を実施しない(できない)場合も、この調査票だけはご返送をお願いします。

問1. <実施の趣旨>一時保護中の子どもたちの声を聞こうという今回の趣旨を、どのように思われましたか？

- ① 賛成    ② やや賛成    ③ やや反対    ④ 反対

問2. <実施状況について>のアンケートは、どの程度の子どもたちに実施できましたか？

- ① 全員に実施    ② 一部の子どもに実施    ③ 実施せず(できず)

問3. <アンケートを実施したところ(一部を含む)にお聞きします>

(1)どのような方法で実施されましたか？

- ① 全員いっせいに実施    ② 数人ずつ実施    ③ 個別に実施

(2)アンケートを実施したのは、どなたですか？(複数回答可)

- ① 児童指導員    ② 保育士    ③ 一時保護所の心理士    ④ 学習指導員  
⑤ 児童福祉司    ⑥ 児童心理司    ⑦ 一時保護所の課長(係長)    ⑧ その他( )

(3)どの時間帯で実施しましたか？

- ① 学習時間    ② 自由時間    ③ 日記を書く時間    ④ その他( )

(4)説明等を行いましたか？(複数回答可)

- ① 1問ずつ読み上げた    ② 1問ずつ説明しながら読み上げた    ③ 子どもに任せた  
④ アンケートの趣旨を説明した    ⑤ 質問がある場合のみ説明した

(5)実施しての感想はいかがですか？

- ① よかった    ② ある程度よかった    ③ あまりよくなかった    ④ よくなかった(理由: )

問4. <アンケートを実施しなかったところ(一部を含む)にお聞きします>

(1)実施しなかった(できなかった)理由は、何ですか？

\_\_\_\_\_

(2)どのような条件があれば、実施できましたか？

\_\_\_\_\_

問5. このようなアンケートを、貴一時保護所の子どもたちに独自に実施していますか？

① すでに実施 ② 実施を検討中 ③ 実施予定なし ④ その他 ( )

問6. 今回の子ども向けアンケートについてのご意見をお聞かせください。

問7. 調査日( 月 日)の入所児童数

	性 別		相 談 種 別			
	男児	女児	養護児(注)	被虐待児	非行児	その他
幼 児						
小1年～小3年						
小4年～小6年						
中 学 生						
中 卒 児						

小4年～中卒児 は、本調査対象児童。(注)養護児には、被虐待児を含まない。

問8. 子どもの属性(子ども用調査票 の表紙右上の枠内に通し番号を打ち、その子どもの属性の該当部分を記入してください。なお調査票に関連した特記事項があれば、お書き下さい。)

	年齢	性別	所属	主訴	在所日数	職員への反抗	調査票に関連した特記事項
1	歳	男・女	小・中・中卒以上	養護・虐待・非行・その他	日目	有・無	
2	歳	男・女	小・中・中卒以上	養護・虐待・非行・その他	日目	有・無	
3	歳	男・女	小・中・中卒以上	養護・虐待・非行・その他	日目	有・無	
4	歳	男・女	小・中・中卒以上	養護・虐待・非行・その他	日目	有・無	
5	歳	男・女	小・中・中卒以上	養護・虐待・非行・その他	日目	有・無	
6	歳	男・女	小・中・中卒以上	養護・虐待・非行・その他	日目	有・無	
7	歳	男・女	小・中・中卒以上	養護・虐待・非行・その他	日目	有・無	
8	歳	男・女	小・中・中卒以上	養護・虐待・非行・その他	日目	有・無	

※足りない場合は、コピーして補充してください。

厚生労働科学研究費補助金（子ども家庭総合研究事業）  
児童虐待等の子どもの被害、及び子どもの問題行動の予防・介入・ケアに関する研究  
（主任研究者 奥山眞紀子）

分担研究報告書  
分担研究者 加賀美 尤祥 山梨県立大学

## 「施設内虐待の予防と介入及び子どものケアに関する研究」

### 研究要旨

本研究は、平成 17 年度より、施設内虐待の発生要因やそのメカニズムを明らかにし、予防・介入や入所児童のケアについて指標を見出すことを目的として進めてきた。

しかし、平成 18 年 8 月、全国各地で相次いで施設職員による子どもへの性的虐待がマスメディアを通じて顕在化したことから当該施設 2 ヶ所へのヒアリングを実施した。

その結果を踏まえ、主任研究者並びに研究協力者と協議検討の上、平成 19 年度は、施設内性虐待に特化した調査研究とすること並びに施設内虐待について 3 年間の総括、提言として以下の報告をすることとする。

本年度の研究においては、施設性的虐待を受けて施設に入所した子どもたちが抱える性化行動やその他の問題を調査し、これらの要素が施設職員の子どもに対する心理傾向にどのような影響を与えるかについて、調査研究を実施した。全国の児童養護施設 365 箇所 の 6 歳以上の女兒を対象に郵送調査を実施し、160 施設から回答を得た。そのうち、性的虐待群が 159 件、性的虐待疑い群が 71 件、対照群が 168 件であった。

AEI-R (Abuse Experience Inventory : 虐待体験評価尺度) と ACBL-R (Abused Children's Behavior Checklist : 虐待を受けた子どもの行動チェックリスト) の結果を比較し、3 群における行動的な影響の違いを検討した。加えて施設職員に調査対照となった子どものケアの困難点を挙げてもらったところ、性的虐待群では「性的逸脱行動」「感情調整障害」「虐待的人間関係の再現性」への対応に苦慮していることが分かった。最も多く挙げられた「性的逸脱行動」について、CSBI (Child Sexual Behavior Inventory : 子どもの性的行動チェックリスト) の結果を比較し、性的虐待の有無による性的行動への影響の違いを分析したところ、性的虐待群は対照群と比べて性的行動が有意に高く現れることが分かった。また、PAAI-CH (施設養育者の子どもに対する心理傾向尺度) の結果を性的虐待群と対照群で比較したところ、女性職員は自己の欲求優先的な傾向が見られ、男性職員では救済者ファンタジー、嫌悪感、擬似恋愛感情といった複雑な心理傾向が見られた。男性職員では 20 代、30 代で顕著に見られ、とりわけ 13~15 歳の子どもに対し顕著に見られることが分かった。

研究協力者	
奥山眞紀子	国立成育医療センター
相澤 仁	国立武蔵野学院
西澤 哲	山梨県立大学
杉山登志郎	あいち小児保健医療総合センター
海野千敏子	あいち小児保健医療総合センター
宮本 信也	筑波大学
星野 崇啓	埼玉県立小児医療センター
稲垣 由子	甲南女子大学
森 茂起	甲南大学
藤林 武	福岡市中央児童相談所
塩田 規子	房総双葉学園
藤澤 陽子	暁学園
城戸 裕子	山梨県立大学

## A. 研究目的

本研究は、2006年度の「施設内虐待の予防と介入及び子どものケアに関する研究」を引き継ぎ、近年マスメディア等でも大きく取り上げられた「施設内性的虐待」の発生要因や、施設入所児童の性的被害体験と性化行動の実態、さらにこうした児童の養育にあたる職員の抱える感情や、心理的傾向性を把握することを目的とする。

### (1) 施設入所児童の性的被害体験の実態

近年、全国の児童相談所における性的虐待の相談処理件数は増加傾向にあり、平成16年度には1,000件を超えた（厚生労働省社会福祉行政業務報告、2006）。これに伴い、性的虐待を受けた子どもが児童養護施設に入所する数も増加している。性的虐待が子どもの精神・心理・行動的発達に与える影響は深刻であり、外傷後ストレス障害の症状に加え、性機能不全、性化行動、夜尿や頭痛などの身体症状、睡眠障害などが指摘されている（Bagley, 1990；Finkelhor, 1985；Nadelson CC et al, 1982；奥山、2002；岡本他、2004）。

本研究では、性的虐待を受けて児童養護施設

に入所している子どもの性的虐待歴と、行動特徴を分析した。

### (2) 性的虐待と性化行動の関連

性的虐待を受けた子どもたちは、様々な心理・行動上の問題を抱えるが、その中でも性化行動は外傷後ストレス障害との関連が指摘されており（Kendall - Tackett, Williams & Finkelhor, 1993）、他の虐待とは圧倒的に違う症状であると報告されている（奥山、2002）。しかし、日本では性的虐待を受けた子どもの性化行動の研究は少なく（藤澤、2007）、性化行動チェックリストなどのアセスメントツールも開発されていない。

そこで本研究では、諸外国で汎用されている性的行動チェックリスト（CSBI；Friedrich、1992）を使用して、性的虐待を受けた子どもの性化行動を分析し、特徴的な性化行動の抽出を試みた。

### (3) 性的虐待を受けた子どもの養育にあたる施設職員の抱える感情、心理傾向の把握

昨年度のヒアリング調査では、3事例のうち2事例で、被害児童は入所以前に性的被害体験があり、日頃から性化行動を表出していた。また、加害職員は、いずれもケアワーカーとして経験年数が浅く、倫理性の欠如はもとより、専門性や援助の技術など未熟な状況にあった。

本研究では、PAAI-CH（施設版養育者の子どもに対する心理傾向尺度；西澤、2006改訂版）を用いて、施設ケアワーカーが性的虐待を受けた子どもに対して抱く心理傾向を分析し、ケアワーカーの性別、子どもの年齢、ケアワーカーの年代による心理傾向の違いを検討した。

## B. 研究方法

### 1. 調査対象

性的虐待群：全国の児童養護施設に入所する、6歳以上の性的虐待を受けた女兒。

性的虐待疑い群：全国の児童養護施設に入

所する、6歳以上の性的虐待を受けた疑いのある女兒。

対照群：全国の児童養護施設に入所する、虐待を受けていない（あまり受けていない）6歳以上の女兒。性的虐待群、性的虐待疑い群として調査対象となった女兒と同年代の女兒を対象とした。

## 2. 調査方法

全国の児童養護施設 365 箇所へ郵送調査を行った。調査期間は、2007年4月～6月と、12月の2期に分けて実施した。調査票は、対象児童の担当ケアワーカーと、対象児童の身近にいる異性のケアワーカーにそれぞれ記入してもらった。

## 3. 調査票

郵送した調査票は、以下の通りである。

- ①子どもの属性、性的虐待歴や開示状況、加害者の状況、ケアの困難点、記入者の属性などを記入するフェースシート
- ②AEI-R（虐待経験尺度；西澤他、2005）
- ③ACBL-R（虐待を受けた子どもの行動チェックリスト；西澤他、2005）
- ④CSBI（子どもの性的行動チェックリスト；Friedrich、1992）
- ⑤PAAI-CH（施設版養育者の子どもに対する心的傾向尺度；西澤他、2006の改訂版）

## C. 研究結果

### 1. 子どもの基本属性

性的虐待群、性的虐待疑い群、対照群の3群について、フェースシートから「年齢」、「入所時の年齢」、「面会・外出・外泊の状況」、「生活安定度」「開示の有無」「ケアの困難点」の情報を収集して比較した。

#### （1）年齢

性的虐待群の子どもについては159件、性的虐待疑い群の子どもについては71件、対照群の子どもについては168件、全体では398件の回答を得た。

回答のあった子どもの平均年齢は、性的虐

待群で13.4歳（SD3.0）、性的虐待疑い群で11.9歳（SD2.9）、対照群で12.5歳（SD3.2）であり、性的虐待群が最も高く、性的虐待疑い群が最も低かった。年齢層の構成比は、性的虐待群と対照群では13歳から15歳が最も多く、性的虐待疑い群では10歳から12歳が最も多かった（表1-1）。

#### （2）入所時の年齢

回答のあった子どもの入所時の平均年齢は、性的虐待群で10.0歳（SD4.0）、性的虐待疑い群で7.5歳（SD3.8）、対照群で7.0歳（SD3.9）であり、一要因分散分析を行ったところ、性的虐待群が他の2群と比べて有意に高い結果となった（表1-2）。

#### （3）面会・外出・外泊の状況

面会「あり」の件数を比較すると、性的虐待群で90件（56.6%）、性的虐待疑い群で46件（64.8%）、対照群で94件（56.0%）であり、性的虐待疑い群がやや多かった（表1-3）。

外出「あり」の件数を比較すると、性的虐待群で67件（42.1%）、性的虐待疑い群で45件（63.4%）、対照群で90件（53.6%）であり、性的虐待疑い群が最も多く、性的虐待群は最も少なかった。

外泊「あり」の件数を比較すると、性的虐待群で70件（44.0%）、性的虐待疑い群で40件（56.3%）、対照群で118件（70.2%）であり、対照群、性的虐待疑い群、性的虐待群の順に多かった。

#### （4）生活安定度

生活安定度の平均は、性的虐待群で3.9（SD1.7）、性的虐待疑い群で4.4（SD1.7）、対照群で3.2（SD1.4）であり、一要因分散分析を行ったところ、性的虐待疑い群、性的虐待群が対照群より有意に高い結果となった（表1-4）。

#### （5）開示の有無

開示の有無について、性的虐待群と性的虐待疑い群を比較したところ、性的虐待群では、「開示あり」が124件（78.0%）、「開示なし」

が22件(13.8%)、性的虐待疑い群では「開示あり」が20件(28.2%)、「開示なし」が43件(60.6%)であり、性的虐待群の方が開示の割合が高かった(表1-5、図1-1、図1-2)。

#### (6) ケアの困難点

回答のあった子どものケアの困難点について、性的虐待群、性的虐待疑い群、対照群の3群で比較した。

性的虐待群では「異性との対人距離の問題」が26件(16.4%)、「性化行動」が24件(15.1%)、「感情調整の問題」21件(13.2%)の順に多かった。性的虐待疑い群では「虐待的人間関係の再現性・力による対人関係」が26件(36.6%)、「感情調整障害」20件(28.2%)、「性化行動」12件(16.9%)、「解離性障害」12件(16.9%)の順に多かった。

対照群では「虐待的人間関係の再現性・力による対人関係」が29件(17.3%)、「感情調整障害」が11件(6.5%)、「整理整頓・身だしなみの問題」が9件(5.4%)の順に多かった。性的虐待群、性的虐待疑い群では異性との対人距離の問題や性化行動へのケアが困難点として多くあげられた。また、性的虐待疑い群では、他の2群ではほとんどあげられていない「解離性障害」が多くあげられた(表1-6)。

## 2. 性的虐待を受けた子どもの基本情報

性虐待群について、フェースシートから「性的虐待をはじめて受けた年齢」、「開示の年齢」、「加害者と子どもとの関係」の度数分布を比較した。

### (1) 性的虐待をはじめて受けた年齢

性的虐待をはじめて受けた年齢の範囲は、0歳から16歳であり、度数分布は5歳と9歳で双峰性を示した(表2-1、図2-1)。

### (2) 開示の年齢

開示の年齢の範囲は、4歳から17歳であり、10歳から14歳にかけて開示する子どもが多かった(表2-2、図2-2)。

### (3) 加害者と子どもとの関係

加害者は、実父が54件で最も多く、次いで養父・継父が41件、母の内縁の夫・恋人が27件、兄が10件、祖父が8件、施設入所男児が8件、父母の知人が6件であった(表2-3)。

## 3. 虐待群別のACBL-R(虐待を受けた子どもの行動チェックリスト)得点の比較

性的虐待群、性的虐待疑い群、対照群の3群について、行動特徴を比較するためにACBL-R得点の一要因分散分析を行った。

その結果、性的虐待群では「自信の欠如」、「注意/多動の問題」、「学校不適応」、「感情抑制/抑圧」、「性的逸脱行動」、「希死念慮/自傷性」、「食物固執」、「感情調整障害」、「危機項目」の下位尺度で対照群よりも有意に高かった。

性的虐待疑い群では「虐待的人間関係の再現性」、「力による対人関係」、「自信の欠如」、「学校不適応」、「感情抑制/抑圧」、「性的逸脱行動」、「希死念慮/自傷性」、「反社会的逸脱行動」、「感情調整障害」、「危機項目」の下位尺度で対照群よりも有意に高い得点となり、「注意/多動の問題」で性的虐待群、対照群よりも有意に高い得点となった。また、有意差は認められなかったが、性的虐待疑い群は「食物固執」を除いた全ての下位尺度で性的虐待群よりも高い得点であった(表3-1、図3-1)。

## 4. 性的虐待の有無によるCSBI(子どもの性的行動チェックリスト)得点の比較

性的虐待の影響として、子どもにどのような性化行動が現れるのかを分析した。

Friedrich(1992)の研究をもとに、AEI-R(虐待経験尺度)の性的虐待尺度で1点以上の得点の付いたもの(N=229)を性的虐待群(SA群)、得点の付いていないもの(N=141)を対照群(NSA群)として分析を行った。年齢層の構成比は、性的虐待群では13歳から15歳が最も多く、対照群では10歳から12歳が最も多かった(表4-1)。



CSBI の 38 項目について、虐待群、年齢層別に行動出現率を求め、対照群で出現率が 20%以上の項目を一般的に発達上見られる性化行動 (DRSB : Developmentally Related Sexual Behaviors) とした。さらに、DRSB を除いた項目のうち、性的虐待群の方が対照群よりも 5%以上出現率の高い項目を性的虐待を受けた子どもに特徴的な性化行動 (SASI : Sexual Abuse Specific Items) とした (表 4-2)。

6 歳から 9 歳では、DRSB が 2、7、15、35 の 4 項目、SASI が 4、5、6、9、11、12、13、17、19、22、23、25、26、27、28、29、30、32、33、34、37 の 21 項目であった。10 歳から 12 歳では、DRSB が 2 の 1 項目、SASI が 1、3、5、7、9、12、13、17、22、26、28、30、35、37、38 の 15 項目であった。13 歳から 15 歳では、DRSB が 35 の 1 項目、SASI が 1、2、7、9、16、19、22、23、26、28、29、37、38 の 13 項目であった。16 歳から 18 歳では、DRSB が 35 の 1 項目、SASI が 1、2、7、9、16、19、22、23、26、28、30、37、38 の 13 項目であった。

性的虐待群、性的虐待疑い群、対照群の 3 群で、CSBI 総得点を一要因分散分析で比較したところ、性的虐待群と性的虐待群が対照群よりも有意に高い得点であった (表 4-3、図 4-1)。

#### 5. 性的虐待の有無と PAAI-CH (施設版養育者の子どもに対する心理傾向尺度) 得点の比較

性的虐待を受けた子どもに対して、施設職員がどのような心理傾向を示すかについて、性的虐待群 (SA 群) と対照群 (NSA 群) で PAAI-CH 得点をケアワーカーの性別ごとに t 検定を行った (表 5-1)。

その結果、女性ケアワーカーは、項目 21「この子がいなければ、もっと楽になると感じる」、項目 39「この子さえいなければ私の仕事はもっといい方向に進んでいると思う」で性的虐

待群の方が対照群より有意に高く、項目 35「この子の側にいると、穏やかな気持ちになる」で対照群の方が有意に高い得点であった。男性ケアワーカーは、項目 3「この子を助けられるのは私しかない」、項目 11「この子と一緒にいると、まるで恋人と一緒にいるような気持ちになる」、項目 12「この子が汚らしいと感じる」、項目 16「この子のことを、実際の年齢よりも高く見てしまう」、項目 20「この子が気持ち悪いと感じる」、項目 30「この子の養育に関しては誰にも口出しして欲しくないと思う」で性的虐待群の方が対照群より有意に高い得点であった。

子どもの年齢層別で、各群の PAAI-CH 得点の t 検定を行ったところ、女性ケアワーカーは、6 歳から 9 歳において項目 40「この子が言うことをきかないのは成長に伴う健康的な自己主張の現われだと思う」で性的虐待群が有意に高く、項目 34「この子のためなら、勤務時間外でも労を惜しまない」で対照群の方が有意に高かった。10 歳から 12 歳においては、項目 2「この子を自分の思い通りに動かそうとしてしまう」、項目 22「この子は私がいなくてやっていけないと思う」で性的虐待群の方が有意に高かった。13 歳から 15 歳においては、項目 16「できるならこの子の面倒だけを見ていたい」、項目 36「この子は私に対して悪意を抱いているような気がする」で性的虐待群の方が有意に高かった。16 歳から 18 歳においては、有意差のある項目は無かった。

男性ケアワーカーは、6 歳から 9 歳において項目 39「この子さえいなければ私の仕事はもっといい方向に進んでいると思う」で対照群の方が有意に高かった。10 歳から 12 歳においては、項目 3「この子を助けられるのは私しかない」で性的虐待群の方が有意に高かった。13 歳から 15 歳においては、項目 11「この子と一緒にいると、まるで恋人と一緒にいるような気持ちになる」、項目 19「この

子が他の職員と親しくしているのを見ると嫌な気持ちになる」、項目 20「この子が気持ち悪いと感じる」、項目 22「この子は私がいないとやっていけないと思う」、項目 26「この子がいるために、私自身の楽しみが奪われた気がする」、項目 30「この子の養育に関しては誰にも口出しして欲しくないと思う」、項目 36「この子は私に対して悪意を抱いているような気がする」で性的虐待群が有意に高く、項目 8「この子の側にいると落ち着かない気持ちになる」、項目 38「この子と一緒にいると楽しい気分になる」で対照群の方が有意に高かった。16 歳から 18 歳においては、項目 9「この子の養育に疲れ果てている気がする」で対照群の方が有意に高かった（表 5-2）。

ケアワーカーの年代別で、各群の PAI-CH 得点の t 検定を行ったところ、女性ケアワーカーは、20 代において項目 40「この子が言うことをきかないのは成長に伴う健康的な自己主張の現われだと思ふ」で性的虐待群が有意に高く、項目 18「この子が私の思い通りに動いてくれないと不安になる」で対照群の方が有意に高かった。30 代においては、項目 2「この子を自分の思い通りに動かそうとしてしまう」、項目 12「この子が汚らしいと感じる」、項目 16「この子のことを実際の年齢よりも高く見てしまう」、項目 20「この子が気持ち悪いと感じる」、項目 22「この子は私がいないとやっていけないと思う」、項目 28「この子に関わっていると自分自身のエネルギーの補給ができない」、項目 39「この子さえいなければ私の仕事はもっといい方向に進んでいると思ふ」で性的虐待群が有意に高く、項目 35「この子の側にいると、穏やかな気持ちになる」で対照群の方が有意に高かった。40 代においては、項目 1「この子にエネルギーを吸い取られてしまう感じがする」、項目 3「この子を助けられるのは私しかない」、項目 7「この子はわざと私を困らせようとしていると思ふ」で性的虐待群の方が有意に高かった。

50 代から 60 代においては、項目 2「この子を自分の思い通りに動かそうとしてしまう」、項目 10「この子が私の思い通りに動いてくれないと不安になる」、項目 18「この子が私の思い通りに動いてくれないと腹が立つ」で対照群の方が有意に高かった。

男性ケアワーカーは、20 代において項目 3「この子を助けられるのは私しかない」、項目 5「この子のことよりも自分の用事を優先したいと思ふ」、項目 7「この子はわざと私を困らせようとしていると思ふ」で性的虐待群の方が有意に高かった。30 代においては、項目 10「この子が私の思い通りに動いてくれないと不安になる」、項目 11「この子と一緒にいると、まるで恋人と一緒にいるような気持ちになる」、項目 19「この子が他の職員と親しくしているのを見ると嫌な気持ちになる」、項目 20「この子が気持ち悪いと感じる」、項目 22「この子は私がいないとやっていけないと思う」、項目 23「この子が私を馬鹿にしているように感じる」、項目 25「この子が思い通りに動いてくれないと施設職員としての自信がなくなる」で性的虐待群の方が有意に高かった。40 代においては、有意差のある項目は無かった。50 代から 60 代においては、項目 5「この子のことよりも自分の用事を優先したいと思ふ」で対照群の方が有意に高かった（表 5-3）。

#### D. 考察

##### 1. 性的虐待の影響としての性化行動とその他の問題

性的虐待を受けた子どもの平均入所年齢は、性的虐待疑い群、対照群と比較して有意に高い年齢であった。このことは、性的虐待を受けた子どもは家庭内でより長期にわたって虐待的環境にさらされていることを示唆している。

生活安定度を対照群と比較した結果、性的虐待群は有意に高い得点を示し、施設におけ

る子どもの生活状況はより不安定であることが明らかになった。また、性的虐待を受けた子どものケアの困難点として、「異性との対人距離の問題」、「性化行動」、「感情調整の問題」が多くあげられ、これらの問題が生活安定度を悪化させていることも分かった。

特にケアで困難とされた「異性との対人距離の問題」、「性化行動」について、CSBI 総得点を分析し、性的虐待群と対照群の2群を比較したところ、性的虐待群の方が有意に高い得点を示し、性的虐待を受けた子どもに特徴的な行動であることが分かった。性的虐待を受けた子どもは、一般的に性的なニュアンスを持つ行動を、性的な意味合いを持たない性化行動として表出する。そのため、幼い子どもほど、日常生活の中で行動化する頻度が高くなると考えられる。このように無意識に現れる性化行動は、異性にとって性的な意味合いを含んだ行動として認識されてしまうことが考えられる。

性的虐待の影響として、子どもがどのような行動を現すかについて、ACBL-R 得点を対照群と比較した結果、上記の行動に加え、「自信の欠如」、「注意/多動の問題」、「学校不適応」、「感情抑制/抑圧」、「希死念慮/自傷性」、「食物固執」、「危機項目」の下位尺度で対照群よりも有意に高い得点となった。すなわち、性的虐待を受けた子どもは、その影響として多岐にわたって行動上の問題を抱えており、より質の高いケアが必要とされるのである。

## 2. 性的虐待を受けた子どもに対する施設ケアワーカーの心理傾向と施設内性的虐待の発生メカニズム

性的虐待を受けた子どもに対する施設ケアワーカーの心理傾向について、ケアワーカーの性別による違いを比較したところ、女性ケアワーカーでは、自己の欲求優先傾向が見られ、男性ケアワーカーでは、救済者ファンタジー（カウンセラーや援助職などに生じやす

いファンタジーであり、「～できるのは私しかない」といった意識のこと）や擬似恋愛感情、嫌悪感など複雑な感情を抱く傾向があることが分かった。

子どもの年齢層別に、性的虐待を受けた子どもに対して男女それぞれのケアワーカーが抱く心理傾向を比較したところ、女性ケアワーカーでは、低学年の子どもに対しては問題行動への理解が見られ、10歳から15歳では、被害的認知や、救済者ファンタジーなどの傾向が見られた。男性ケアワーカーでは、10歳から12歳で救済者ファンタジーが見られ、13歳から15歳では擬似恋愛感情、嫉妬心、救済者ファンタジー、自己の欲求優先、嫌悪感、被害的認知を抱く傾向が見られた。

ケアワーカーの年代別に、性的虐待を受けた子どもに対してケアワーカーが抱く心理傾向を性別で比較したところ、女性ケアワーカーでは20代では子どもの問題行動への理解が見られ、30代では自己の欲求優先、嫌悪感、疲労・疲弊などの心理傾向が見られた。また、40代では、疲労・疲弊、被害的認知などの心理傾向が見られたが、50代以上では性的虐待を受けた子どもに対して特徴的な心理傾向は見られなかった。男性ケアワーカーでは、20代で自己の欲求優先、救済者ファンタジー、被害的認知などの傾向が見られ、30代では完璧志向性（自信の欠如）、擬似恋愛感情、嫌悪感、被害的認知などの心理傾向が見られた。また、40代以上では性的虐待を受けた子どもに対して特徴的な心理傾向は見られなかった。

これらの結果を比較すると、性的虐待を受けた女兒に対する養育者の心理傾向は、ケアワーカーの性別に関わらず、救済者ファンタジーや嫌悪感、疲労・疲弊、自己の欲求優先、被害的認知などが高いことが分かった。性的虐待を受けた子どもは、様々な行動的・精神的な問題を抱えており、一生懸命子どもに関わろうとすればするほど、「私しか理解できない」といった救済者ファンタジーが高まり、

このような心理傾向が他のケアワーカーを遠ざけ、子どもとの密な関係を招くことが予想される。しかし、いかに子どもを理解しようとしても、行動化が減少しなければ、疲労・疲弊が増し、自己の欲求優先や被害的認知、ケアワーカーとしての自信の欠如に繋がることも考えられる。

篠崎（2007）によれば、トラウマを被った被虐待児に対応する児童養護施設職員は、性的暴力や家庭内暴力の被害者に対応するカウンセラーよりも共感疲労（相手のトラウマに二次的に曝されることによって発生する二次的外傷性ストレス）が高く、この共感疲労の高さには、担当児童への否定感や恐怖心、行動の受容、勤務時間内で子どもに十分な対応ができるかどうかなどが関係していた。施設のケアワーカーは、日常的に被虐待児へのケアを行っているが、その中でも性的虐待を受けた子どもの被っているトラウマは大きく、ケアワーカーの受ける二次的外傷後ストレスもより大きいことが推察される。

今回の研究結果で、30代の男性ケアワーカーは、13歳から15歳の性的虐待を受けた女児に対して恋愛に近い感情を抱く心理傾向が見られた。他の被虐待児と比べて、性的虐待を受けた子どもに性化行動が顕著に見られることは先に述べた通りだが、CSBIの分析結果では、13歳から15歳の子どもには他の年齢層と比較して、項目2「人の非常に近くに立つ」、項目16「他の人に自分と性的行為をするように頼む」の2項目で行動の出現比率が高い傾向があった。性的虐待を受けた子どもの行動傾向に対する知識が不十分であり、自分がこの子をなんとかしなくてはならないと考えているケアワーカーであれば、このような子どもの性化行動に刺激され、逆転移が生じてしてしまうことも考えられる。

### 3. 施設内性的虐待の予防

#### (1) 施設内性的虐待の予防

性的虐待を受けた子どもに特徴的である対人距離の問題は、ケアワーカーがその特徴を理解し、子どもに対して対人距離のワークなどのプログラムを実施して、身体接触を伴わない愛着関係の形成を行っていく必要がある。また、若いケアワーカーは、性的虐待を受けた子どもの行動特徴についての専門的な研修を受け、さらに二次的外傷後ストレスや逆転移についての知識と予防技術を学ぶことも重要である。

これらの実践を施設内で行うためには、他のケアワーカーとの連携は必要不可欠であり、若いケアワーカーへのスーパーヴィジョン体制の確立が求められる。

#### (2) 性的虐待疑い群への理解と対応

性的虐待疑い群は、ACBL-R、CSBI共に3群の中で最も高い得点を示した。これらの行動化の高さは、子どもの年齢が低いために虐待への認識ができないことや、言語化が困難なことに起因すると考えられる。

性的虐待疑い群の入所平均年齢は、7.5歳であり、性的虐待群と比べて有意に低く、対照群とあまり変わらない年齢であった。年齢が低いうちに性的虐待を受け、他の理由で施設に入所した子どもたちは、その事実が認識されないまま施設で生活する可能性が高い。性的虐待を受けた事実が疑われるきっかけは、主に性化行動や子どもからの開示によることが多い。

今回の研究結果では、性的虐待を受けた子どもの開示が10歳から増加していた。この結果から、子どもたちが自分の身に起きた状況を理解し、自ら言語化して被害を訴えることができるようになるためには、小学校の高学年程度の発達水準が必要であると推察される。したがって、低年齢で性的虐待を受けて入所した子どもたちに対しては、性的虐待の可能性を常に視野に入れながら、安心して開示できる環境を提供することが必要不可欠である。